

タイトル	18 世紀フランスの経済発展の再検討：農村工業化研究とジェンダーの視点から
著者	仲松，優子；NAKAMATSU, Yuko
引用	北海学園大学人文論集(70)：47-63
発行日	2021-03-31

18 世紀フランスの経済発展の再検討

— 農村工業化研究とジェンダーの視点から —

仲 松 優 子

はじめに

近年の経済史家ギヨーム・ドダンによる著書『商業と経済的繁栄 — 18 世紀フランス』（初版：2005 年，第 2 版：2011 年）によれば，18 世紀のフランスはイギリスに引けをとらない経済成長の時代を経験したという¹。18 世紀フランスの経済は，フランス革命にいたるまで停滞しておらず好調であったとするこうした見方は，1960 年代頃より経済史家の間において優勢であるといえるだろう。1944 年に発表されたエルネスト・ラブルースの『アンシアン・レジーム末期と革命初期におけるフランス経済の危機』は，フランス革命に先だって 18 世紀の後半に深刻な経済危機が存在したことを主張し²，革命史研究に大きな影響を与え続けたが，こうした見方は，1960 年代にフランソワ・クルーゼに悲観的すぎると評価された³。また革

¹ Guillaume Daudin, *Commerce et prospérité: la France au XVIII^e siècle*, Paris, 2011 (1^{ère}: 2005).

² Ernest Labrousse, *La Crise de l'économie française à la fin de l'ancien régime et au début de la Révolution*, Paris, 1944.

³ François Crouzet, «Angleterre et France au XVIII^e siècle: essai d'analyse comparée de deux croissances économiques», *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*, vol. 21, n° 2, 1966, pp. 254-291 (井上櫻子訳「18 世紀におけるイギリスとフランス—両国の経済成長に関する比較分析試論」E・ル＝ロワ＝ラデュリ／A・ビュルギエール監修（浜名優美監訳）『叢書『アナール—1929-2010』—歴史の対象と方法』第 3 巻，藤原書店，2013 年，329-370 頁）。

命200周年を契機として執筆されたジャン＝ピエール・ブスの論文は、ラブルースが強調していたルイ16世治世期(1774-92年)の経済的困難について、全般的なものとしてみることを否定した⁴。ドダンの著作は、18世紀フランスの経済は革命にいたるまで繁栄していたとするこうした経済史家たちの見方を前提としている。

ドダンの著作は、18世紀フランスの経済発展をもたらしたものとして、対外貿易の繁栄を重視しているが、それと同時に、国内産業および国内商業の発展が合わせて論じられている。18世紀フランスの対外貿易、特に植民地貿易の増大は、クルーゼをはじめ既存の研究でもすでに指摘されてきたことであるが、ドダンはこの対外貿易と、国内産業および商業の相互連関のもとで、フランスの経済発展をとらえようと、フランスの経済発展のモデル化を試みた点に特徴がある。

ドダンの著作は、多岐にわたる論点を含んでいるが、本稿ではそのうち、ドダンがフランス経済の発展の起爆剤としてすえた農村の工業化への着目の仕方を問題にしていく。本書では、工業製品の生産の場として、都市ではなく農村の果たした役割が重視されている。18世紀のフランスでは、対外貿易による新規の商品の流通の増大と、これに対する需要の拡大が、農民による工業製品の増産をうながし、これを取り引きする国内の商業ネットワークが活性化され、さらにフランスの対外貿易が大きく発展し繁栄したことが論じられている。

ただし、農村の工業化については、すでに1970年代にフランクリン・F・メンデルスらによってプロト工業化論が提唱された際にその重要性が主張されていた⁵。ドダンがうながした農村工業の再評価は、プロト工業化論

⁴ Jean-Pierre Poussou, «Le dynamisme de l'économie française sous Louis XVI», *Revue Economique*, vol. 40, n° 6, 1989, pp. 965-984. 「経済発展」をめぐる議論の経緯については、以下の概説書が完結に整理をしている。Pierre-Yves Beaurepaire, *La France des Lumières, 1715-1789*, Paris, 2011, pp. 762-771.

の議論をどのように継承したものであるだろうか。また、1970・80年代のプロト工業化論に対しては、その労働の担い手に着目した研究として、女性史やジェンダー史の視点から批判が行われている。プロト工業化の担い手の多くは女性労働者であったからである。転機となったのは1980年代のゲー・L・ガリクソンによる研究であった⁶。ガリクソンはノルマンディー地方を対象とした綿密な実証研究を行い、プロト工業化は性別分業の観点から議論すべきであることを主張した。このような女性労働を重視した実証研究とこれに基づくプロト工業化論への批判を、ドダンは十分にふまえているのかという点も検討する必要がある⁷。

本稿は、農村工業化研究の側面から「経済発展」論を考察することを目的として、近年の研究を代表するものとしてドダンの主張を整理し、同時にプロト工業化論以降の女性労働史研究の成果をふまえながら、現在の農村工業化研究の議論のあり方を検討することを目的とする。以下では、ド

⁵ Franklin F. Mendels, «Proto-Industrialization: The First Phase of the Industrialization Process», *Journal of Economic History*, tom. 32, n° 1, 1972, pp. 241-261 (石坂昭雄訳「プロト工業化—工業化過程の第一局面」F. メンデルス／R. ブラウンほか(篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編訳)『西欧近代と農村工業』北海道大学図書刊行会, 1991年, 1-28頁): idem, «Agriculture and Peasant Industry in Eighteenth-Century Flanders», in William N. Parker and Eric L. Jones (eds.), *European Peasants and Their Markets: Essays in Agrarian Economic History*, Princeton, 1975, pp. 179-204 (石坂昭雄訳「18世紀フランドルにおける農業と農民工業」メンデルスほか『西欧近代と農村工業』, 167-197頁)。

⁶ Gay L. Gullickson, *Spinners and Weavers of Auffay: Rural Industry and the Sexual Division of Labor in a French Village, 1750-1850*, Cambridge, 1986.

⁷ 1970・80年代に提唱されたプロト工業化論に対しては、女性労働の観点から批判が向けられている。その詳細は以下で論じている。拙稿「18世紀フランスにおけるプロト工業化とジェンダー」浅田進史・榎一江・竹田泉編『グローバル経済史にジェンダー視点を接続する』日本経済評論社, 2020年, 75-100頁。

ダンの議論を中心にすえて、18世紀フランスの経済発展の評価の仕方や、農村工業化の重視とプロト工業化論との違い、農村工業の担い手と女性労働の問題の扱い方、最後に消費文化の変容と「勤勉革命」について検討していく。そのうえでドダンらの主張する「経済発展」が、いかなる点から検証を加えていかなければならないのか、そしてそれはジェンダー的な視点とどのような関係にあるのかという点について考察していく。

1. 18世紀フランスの経済発展の評価

すでに述べたように、18世紀のフランス経済の繁栄については、多くの経済史家が主張している。これまでの研究による数値を参照しながらドダンが独自に行った試算によると、18世紀フランスにおいて、商業活動などのサービス業を除く純生産（PPB：Produit physique brut）は、名目成長率が年1.25%であり、これを国民一人当たりの実質成長率に換算すると、年0.6%の成長がみられたという。また、このサービス業を除く純生産の部門別の割合をみると、18世紀初めには工業部門は27%を占めていたが、18世紀末には35%から45%へとその割合を増加させるにいたったという。生産における農業部門の占めた割合は依然として高いが、工業部門の成長こそが、18世紀フランスの経済成長の要を握っていたとドダンは主張している⁸。

このように18世紀のフランスでは国内の生産の増大がみられ、そしてそれが工業部門の発展によるものだということをドダンは主張したが、次に問題になるのは工業部門の生産の増大を誰が担ったのかという点だろう。この問題を考えるうえで、ドダンが着目したのが、18世紀における都市人口と農村人口の割合とその変遷である。国立人口問題研究所（INED）の調査によると、フランスにおいて都市人口が全人口において占める割合

⁸ Daudin, *op.cit.*, pp. 15-25.

は、1750 年に 18.2%, 1775 年に 20.5%, 1790 年に 20.5%, 1806 年に 18.8% と推移している。この場合の「都市」は、1836 年段階の郡都（chef-lieu d'arrondissement）を指しており、都市人口の算出方法としては異論もありうるものであるが、フランスの代表的な都市の人口の割合が、18 世紀をとおり安定していた傾向がうかがえる⁹。ドダンはこのことをふまえ、18 世紀のフランスでは都市への人口集中が起きておらず、工業化は農村の労働力が動員されるかたちで推進されたとみなしている¹⁰。

2. 農村工業化の重視

ドダンはこのように、18 世紀フランスの工業製品の生産の増大は、都市ではなく農村によるものであったとしているが、彼自身が指摘しており、そう判断するにあたってはいくつかの問題がともなう。

まず、実際に農村で工業活動に従事した人々の人数や、農村での工業製品の生産量を、フランス全体について数値化することは史料的に難しい点である。当時の地方の産業について知るべき立場にあるマニュファクチュア視察官も、全体を把握することはできていない。しかし、いくつかの指標となる数字が残されている地方も存在する。例えば都市と農村のマニュファクチュアがそれぞれ備えていた織機の数と生産量について、比較する数字が残されている場合があり、そこから農村の生産量が都市に勝っていたことを読み取ることができるからである。また、都市から農村へと生産の現場が移されたという当時の証言も存在しており、これらがドダンの主張の根拠となっている¹¹。

都市と農村の生産力の違いを示すことについては、このような史料的な問題に加えて、当時の工業製品の生産方式に由来する問題もある。それと

⁹ *Ibid.*, pp. 20-21.

¹⁰ *Ibid.*, p. 42.

¹¹ *Ibid.*, pp. 42-43.

いうのも、18世紀には都市と農村の間で、工業製品の生産において緊密な分業体制がとられていたからである。例えば工業製品のなかでも最も生産量の多い繊維製品については、一般的にまず原材料の洗浄などの準備工程は都市で行われ、その後の紡糸は農村が担い、織布作業の現場は農村の場合もあれば都市の場合もあった。そしてその後の仕上げや染色は都市の労働者が行った。したがって、都市と農村の生産を明確に分離することはできないのである¹²。

しかしながら、それでもドダンは農村こそが工業製品の生産量の増大を支えていたとする。18世紀に繊維産業の衰退がみられる都市の事例は多く、繊維産業の体制がますます農村に依存したものに变化していったこと、そして先に指摘したように都市への人口集中が起きていないことを根拠とし、18世紀には農村こそが工業生産の重要な担い手であったと主張している¹³。

こうしたフランスの経済的な繁栄を主導したものとして、農村における工業化を重視するドダンの見方は、1970年代に提唱されたプロト工業化論とどのような違いがあるだろうか。この点について次に検討していこう。

3. プロト工業化論との違い

1970年代に提唱されたプロト工業化論は、アメリカ合衆国の経済史家メンデルスによって先鞭がつけられ、フランス史の領域ではピエール・デーヨンによって積極的に導入された¹⁴。プロト工業化論では、農村の工業化

¹² *Ibid.*, pp. 42-44.

¹³ *Ibid.*, pp. 44-46.

¹⁴ Mendels, *op.cit.*; Pierre Deyon, «La diffusion rurale des industries textiles en Flandre française à la fin de l'Ancien Régime et au début du XIX^e siècle», *Revue du Nord*, tom. 61, n° 240, 1979, pp. 83-95 (佐村明知訳「フランス・フランドルの農村織物業の展開—アンシャン・レジーム末期から19世紀初

を後の産業革命を準備したものとして位置づけ、中世より農村で営まれた手工業とは異なり、国内市場および海外市場に向けた生産が行われるようになった段階をプロト工業化と定義した。プロト工業化論の特徴は、産業革命はどのようにして開始されたのかという問題を、農村を舞台として考察したところにある。しかし、プロト工業化論は当初から多くの関心と賛同だけでなく、批判も向けられていた¹⁵。

ドダンは、これまでの批判をふまえ、プロト工業化論が論じていた問題のいくつかを本書では扱わないとしている¹⁶。一つ目は、工業化と脱工業化の問題である。フランスでは、プロト工業化で栄えた地域の多くが、その後の 19 世紀の産業革命の時代にむしろ脱工業化の道を歩んでおり、プロト工業化論が提示したプロト工業化から産業革命へという農村の発展と移行のモデルは、ほとんどの地域で当てはまらないうと、多くの研究者によって批判されている。ドダンは、本書は 19 世紀を研究対象としていないため、この問題は関係がないとしている。

二つ目に、プロト工業化論が示したモデルのうち、人口変動についても検証の対象としないとドダンはしている。プロト工業化論は、産業革命を準備する大きな要因として労働力がいかに確保されたのかという関心をもっていた。プロト工業化論は、農村の工業化が農民の結婚の機会を増やし人口増加を導いたことを主張したところにも大きな特徴がある。プロト工業化と結婚行動の関係についても、その後の実証研究の結果、プロト工業化論が主張するような経緯をたどらないという批判が寄せられたが、ドダンはこの問題も扱わないとしている。

このようにドダンはプロト工業化論について、脱工業化と人口変動とい

頭にかけて」メンデルスほか『西欧近代と農村工業』, 199-220 頁)。

¹⁵ フランスにおけるプロト工業化論をめぐる批判を整理したものとして、以下を参照。Gwynn Lewis, «Proto-Industrialization in France», *Economic History Review*, tom. 47, n° 1, 1994, pp. 150-164.

¹⁶ Daudin, *op.cit.*, pp. 41-42.

う二つの論点を本書では扱わないとしている。これに対して、ドダンが関心を寄せているのは、プロト工業化が示したモデルのうち、農民が工業化の担い手であったという点と、農村が地域の枠組みを超えて市場経済に統合されていく点であるとしている。

こうしたプロト工業化論との違いに加えて、さらに根本的にドダンの研究がプロト工業化論と異なる点は、プロト工業化と貧困の関係はどのようなものであったのかという問題の扱い方にある。プロト工業化論とこれを参照した実証研究においては、プロト工業化と農村の貧困化の関係は常に問われ続けてきた問題である。プロト工業化を引き受ける原因としての貧困や、あるいはプロト工業化を経た結果としての貧困化は、それが実際に生じたのかどうかも含めて議論が積み重なってきた。しかしドダンは、プロト工業化では利益を得た人々のほうが、貧困に苦しんだ者よりも多かったと判断している。そしてプロト工業化によって人口圧力の増加やプロレタリア化というネガティブな側面が生じたかもしれないが、それよりも新しい消費文化の誕生や社会的上昇といったポジティブな側面により関心があるとし、貧困化の議論の深化を避けているのである¹⁷。

このように、ドダンの主張とプロト工業化論は、農村の工業化を重視するという点において共通しているが、経済と社会の関係を問うという視点において、両者の違いがあるように思われる。プロト工業化論は、工業化が本格的に開始される前の段階で、農村で広範囲に工業化が生じていたとみなし、これが資本主義の歴史においてもった意味と、それと同時に社会が被った変化に注目することをうながした。これに対してドダンは、農村でこの時期に工業化が進んだという理解にとどめず、農村の工業化こそが起爆剤となって、国内および国際商業の発展をうながし、18世紀のフランス経済の発展がもたらされたという。農村工業が経済発展に寄与したもののとして、プロト工業化論に比べてさらに強調されており、その「経済発展」

¹⁷ *Ibid.*, pp. 89-92.

を説明するために、農村工業化の「ポジティブな」側面が特に重視されているのである。

しかし、こうした社会構造の分析を深めることのない「経済発展」の議論は、どれほどこの時代のフランス社会を理解するうえで有効なのであるうか。ドダンの「経済発展」論をさらに考えるために、生産の担い手である農村の労働の現場についての理解の仕方を次にみていこう。プロト工業化論は、女性労働史の発展をふまえて議論を豊かにしていく必要があり、また貧困化の問題を議論するうえで女性労働のあり方は根本的な問題であるが、ドダンの著作では、女性労働がいかに描かれているのだろうか。

4. 農村工業の担い手と女性労働

プロト工業化の現場に、女性労働者は多く存在していた。プロト工業化研究において、性別分業の観点から工業化を議論する必要を説いたガリクソンによれば、ノルマンディー地方の綿織物産業において、労働に従事していた者は圧倒的に女性が多かった。女性には紡糸という繊維産業で最も人手が必要な仕事が割り当てられており、そのため多くの女性労働者がプロト工業の現場で働いていたのである。ノルマンディー地方の主都ルアン近郊のコー地方で繊維産業に従事していた労働者のうち、約 88 パーセントは女性労働者であったという¹⁸。

ドダンはたしかに、18 世紀の繊維産業は、農村女性による紡糸と、農村男性による織布、都市労働者による仕上げという分業のなかで行われたとしており、女性労働者の存在を明言している¹⁹。この点は、1970・80 年代のプロト工業化論が女性労働者の存在を軽視し、あるいは性別分業などの家族内の労働をめぐる権力関係に光を当てていなかったことを考えれば、見解の進展を示しているといえるだろう。

¹⁸ Gullickson, *op.cit.*, p. 69. この点は、拙稿前掲論文で詳細を論じている。

¹⁹ Daudin, *op.cit.*, p. 44.

しかし、この指摘とは矛盾をきたす論述が、ドダンの著作には散見される。一点目は、農村の工業従事世帯のイメージが、きわめて男性労働者中心的な描かれ方をしている点である。農村の家内工業に従事するのは、「多くの場合、父親と息子たち、あるいは兄弟姉妹のメンバー」としているが、重要な働き手であった妻を働き手に入れておらず、また娘などの女性労働者を二義的な立場として位置づけている²⁰。これは、家内工業の実態を説明するのに適切な定義だとは思われない。

二点目に、農村の世帯が生産のユニットとして、一体性をもったものとして説明されている点である。ドダンは、どのようにして農民が工業に従事するようになるのかという点を考察した箇所では、男性農民が農閑期に工業を行うようになり、これにともない女性や子供の活動も家内工業として組織化されることになったと述べている²¹。女性や子供の労働は、男性農民の労働に付随して生じるとみなし、農業を行うか工業を行うかといった農民の労働の選択において、男性労働者のみを選択主体として想定しているのである。ここには、プロト工業化論が依拠した「家族経済 (family economy)」概念に対する、批判の議論が反映されていない。

「家族経済」概念は、プロト工業化論のなかでも、ドイツのハンス・メディックによって主張されたものである²²。メディックは、プロト工業化期においては、家族が生産ユニットとして中心的役割を担ったとし、こ

²⁰ *Ibid.*, p. 49.

²¹ *Ibid.*, p. 77.

²² Hans Medick, «Zur strukturellen Funktion von Haushalt und Familie im Übergang von der traditionellen Agrargesellschaft zum industriellen Kapitalismus: Die proto-industrielle Familienwirtschaft», Werner Conze (Hg.), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas: Neue Forschungen*, Stuttgart, 1976, pp. 254-282 (馬場哲訳「伝統的社会から産業資本主義への移行における世帯と家族の構造的機能—プロト工業的家族」メンデルスほか『西欧近代と農村工業』, 29-63頁)。「家族経済」概念に対する批判の議論は、以下で整理している。拙稿前掲論文, 91-93頁。

れを基盤とする経済を「家族経済」とよんで、この時代の経済の特徴として提示した。しかし、メディックの示した家族像には、多くの問題があった。男性家長を中心に家族が一体化して一つの生産に従事するとする見方は、単純な世帯像であり、実際は家族のメンバーは様々な労働の総体から収入を得ていた²³。そして多くの独身者や女性家長が存在したことも、念頭におく必要がある²⁴。女性労働の多様性は、「家族経済」という用語ではもはや表現することは不可能であるというのが、現在の女性労働史研究の到達点である²⁵。ドダンは、このような研究の発展をほとんどふまえておらず、1970 年代のメディックによる家内工業の描き方から脱していないのである。

三点目に、ドダンの女性労働の軽視は、統計処理の仕方においても端的に表れている。ドダンは、18 世紀のフランスにおいて農民の工業への動員がどの程度可能であったのかという点を明らかにしようと、18 世紀当時のフランスの全人口の消費カロリーを算出し、そしてこのカロリーを穀物生産によってまかなう場合に、農業従事者が何人必要であったのかという点を計算することによって、答えを導き出そうとしている。この時、ドダンは女性のパンの消費量を男性の半分として提示し、そして労働の生産性を

²³ Ad Knotter, «Problems of the «Family Economy»: Peasant Economy, Domestic Production and Labour Markets in Pre-industrial Europe», in Maarten Prak (ed.), *Early Modern Capitalism: Economic and Social Change in Europe, 1400–1800*, London and New York, 2001, pp. 135–160 (originally published: *Economic and Social History in the Netherlands*, n° 6, 1994, pp. 19–59).

²⁴ Judith M. Bennett and Amy M. Froide, «A Singular Past», in Bennett and Froide (eds.), *Singlewomen in the European Past, 1250–1800*, Philadelphia, 1999, p. 2; Gullickson, *op.cit.*, pp. 78, 221.

²⁵ Nina Kushner and Daryl M. Hafter, «Introduction», in Hafter and Kushner (eds.), *Women and Work in Eighteenth-Century France*, Baton Rouge, 2015, pp. 1–15.

男性に比べて女性は少ないものと見積もっているが、果たしてそう判断する根拠はどこにあるのだろうか²⁶。明確な説明はない。

このように、ドダンが示す農村工業は、労働の実態を十分に示すことができておらず、特に女性労働の軽視を見て取ることができる。女性労働がプロト工業において、きわめて重要なものであったという点は、すでに多くの研究が示してきたが、ドダンの研究にはこれがまったく反映されておらず、1970・80年代のプロト工業化論が提示した労働と家族像が批判されずにそのまま提示されているのである。

先にみたように、ドダンはプロト工業化を貧困化の問題と関係づけて議論することを避けているが、女性労働者をプロト工業の主軸として理解するとき、この点にも批判が向けられることになるだろう。プロト工業化を担った者の圧倒的な多数は女性労働者であり、そして女性労働者の賃金は男性に比べて低く抑えられていた。これらの点を、プロト工業化と経済発展の関係性を論じる場合には、前提として十分にふまえてはならない²⁷。そうすると、ドダンのいうような、プロト工業によって利益を得た者が多かったという評価は、果たしてどの程度妥当性をもっているのだろうか。プロト工業と「経済発展」の関係は、女性労働のあり方を含めた労働の現場を分析しない限り、十分に答えることはできないだろう。

5. 消費文化の変容と「勤勉革命」

ドダンが農村の工業化に注目しながら、その原因や結果としての農村の貧困について議論を深めないとするならば、18世紀の農村の工業化の原因

²⁶ Daudin, *op.cit.*, pp. 69-70.

²⁷ この時代の男女の労働賃金の格差については、以下を参照。Katrina Honeyman and Jordan Goodman, «Women's Work, Gender Conflict, and Labour Markets in Europe, 1500-1900», *Economic History Review*, tom. 44, n° 4, 1991, pp. 608-628.

として何を重視しているのだろうか。ドダンは、農村における工業生産量が増大する際には、農村の工業の生産性が増しているとはあまり考えられず、農村の労働力の供給の増加がみられたとし、そしてこれこそが 18 世紀フランスの経済成長の中核に存在していたと主張している²⁸。

それでは、農村の工業に対する労働力の供給の増加は、どのようにして起きるのか。この点について、ドダンは依拠しているのは、オランダの経済史家ヤン・ド・フリースの「勤勉革命（industrious revolution）」論である²⁹。ドダンの著作では、まず農村の世帯内における活動や余暇の時間は、工業生産に振り向けることができるものとして考えられている。例えば、農業は季節労働であるため、冬の時間を農村工業に割り当てることができる。さらに生産のユニットは、個人よりも世帯単位であったとみなし、そのため女性と子供の労働を市場向けの生産に再組織化することが可能であったとする。こうした労働の「保留されていた」部分が工業化に動員されるようになる変化を、ド・フリースにならって「勤勉革命」とよび、ドダンもこれによって農村工業の出現を説明している³⁰。

こうした労働力の配分の変化を後押ししたものとして、ドダンは指摘しているのは、消費文化の変容である。これまでの文化史研究で明らかにされてきた 18 世紀の消費文化の変化は、都市を事例としたものが多かったが、農村でもゆっくりとしたものであったものの、これを確認することができる。そして、その農民自身の新しい消費のあり方が、農民の市場経済への統合をうながしたとみている³¹。

これに加えて、農民が手工業商品の生産へと舵をきっていくには、一時的な農業危機だけでなく、新しい経済状況の安定性に対する信頼が必要

²⁸ Daudin, *op.cit.*, p. 77.

²⁹ Jan de Vries, «The Industrial Revolution and the Industrious Revolution», *The Journal of Economic History*, vol. 54, n° 2, 1994, pp. 249-270.

³⁰ Daudin, *op.cit.*, p. 77.

³¹ *Ibid.*, pp. 83-87.

だったという³²。商人の活動に依存した問屋制システムの構築や、市場へのアクセスが準備できたことが、農民を市場向けの工業生産にとりかからせたとする。つまり、国内商業のネットワークが活発化することと、農村工業の発達は、緊密な関係にあることが主張されている。

このようなドダンの示す、農村工業化の原因については、ジェンダー的な視点から問題を三点指摘しておきたい。まず一点目は、消費を行い、労働力を配分する主体として「世帯」を想定していることである。先に、ドダンはメディックの「家族経済」概念から脱していないと述べたが、ここでもそれは指摘できるだろう。「世帯」を工業化の主体とする議論は、ド・フリースの「勤勉革命」論でもみられるものであり、彼は「世帯経済(household economy)」という言葉も用いている³³。こうしたド・フリースの見方は、ドダンにも受け継がれているといえるだろう。しかし、メディックの「家族経済」に向けられた批判の多くは、そのまま「世帯経済」にも当てはまるのではないだろうか。

二点目は、女性や子供の労働は、工業化という状況のなかで、新たにこれに振り向けられる「保留されていた」労働力であったのかという問題である。この点について、ドダンは具体的な事例をあげて説明していない。女性と子供の労働のあり方が、農村工業化の前後でどのように変容しているのかという点は、やはり労働の現場について、ジェンダー的な視点も含めて実証的に検証する必要があるだろう。ドダンが依拠しているド・フリースの見解についても、同様な批判が向けられており、議論を支える証拠がなく、「勤勉革命」論の重大な弱点であるという批判が、女性労働史研究から行われている³⁴。

³² *Ibid.*, pp. 87-92.

³³ De Vries, *op.cit.*, pp. 260-261. ド・フリースは、ここで「世帯経済」という概念に対する批判を想定して、「世帯」の一体性を過度に強調することに対する注意をうながしている。しかし論文全体としては、消費や労働力配分の主体として「世帯」を想定することを肯定している。

三点目は、18 世紀の農村における消費文化の変容を工業化の前提とするものの可否である。ドダンの議論は、農村社会を動態的なものとしてとらえたいという問題提起という意味ももち、こうした見方によって 18 世紀の農村社会のダイナミズムをとらえることに寄与する側面はあるだろう。しかし、農村の工業化の原因として農民の消費の変化を主張するのであれば、農民の経済力や生活レベルといった点の分析は必要不可欠だろう。そしてこのとき、女性の低賃金もまた問題になるはずだ。

ノルマンディー地方のプロト工業化を性別分業の視点から分析したガリクソンは、彼女が分析に取り組んだオフエという農村では、プロト工業を担った農民たちは、農業と工業にともに従事することによって、生存レベルを維持できていたとみなしている。ガリクソンも、工業化はオフエに経済的なゆとりをもたらしたと評価している。しかしそれは、家族のメンバーが周辺地域にとどまることができた、つまり出稼ぎにいかなくても済むようになったという程度の話である³⁵。

また、ド・フリースに向けられた批判も、ドダンの主張を再考するうえで意義があるだろう。18 世紀のヨーロッパで植民地由来の新たな商品に対する需要が高まり、消費が変化し増加したという主張に対して、この時代の労働者の多くは、食糧を手に入れて生きていくのがやっとであり、18 世紀にはむしろ生活レベルと実質賃金の低下さえも起きていたことが指摘されているからである³⁶。

結局のところ、農村の工業化を議論するには、「勤勉革命」論に依拠したとしても、労働の現場についての社会的な、そしてジェンダー的な分析が欠かせないのではないだろうか。農村工業化と貧困の関係の議論は、こう

³⁴ Deborah Simonton, «Introduction», in Simonton and Anne Montenach (eds.), *A Cultural History of Work: In the Age of Enlightenment*, London, 2019, pp. 15-16.

³⁵ Gullickson, *op.cit.*, p. 37.

³⁶ Simonton, *op.cit.*

した点をふまえなければ、その妥当性は議論できないだろう。

おわりに

以上でみてきたとおり、ここ数十年の経済史家の間では、18世紀のフランスの経済は革命にいたるまで繁栄していたという見解が強くみられる。近年のドダンによる研究はその代表的なものであり、経済成長が対外貿易だけでなく、国内産業や商業においても指摘され、この三者の緊密な関係のもとに経済発展があったことが、モデル化されて提示されている。

ドダンはこの経済発展モデルの中核に、農村の工業化をすえている。しかしドダンは、農村工業化を重視しているにもかかわらず、1970年代のプロト工業化論に比べて、地域社会の構造へのまなざしが後退していることも見て取ることができる。農村工業化の歴史的な評価が、「経済発展」という解釈のもとに一元化され、農村の貧困化についての議論の深化は避けられているのである。

また、プロト工業化論に加えられた女性労働研究からの批判と実証研究の進展が反映されていないことも、ドダンの研究の特徴として指摘しておかなければならない。しかし、農村工業の発展を、18世紀フランスの経済発展の核としてすえるのであれば、農村工業の実態について、女性労働史研究の発展をふまえながら議論する必要があるだろう。女性労働の農村工業化への関与の仕方は、農村工業を把握するうえできわめて根本的なものだったからである。

すでにみてきたように、ドダンの描く経済発展モデルにおける農村工業化の位置づけの仕方については、1970年代のプロト工業化論だけでなく、1990年代に主張され、現在にいたるまで大きな波紋を広げている、ド・フリースの「勤勉革命」論との類似点を指摘することができる。「勤勉革命」論に対して向けられている批判は、ドダンの示す経済発展モデルや、現在の農村工業化研究のあり方を見直すうえでも、意義深いものといえるだろう。

社会史家のボールペールは、ドダンの「経済発展モデル」は、地域研究による妥当性の検証が必要であることを指摘している³⁷。ただし、労働の現場に肉薄したミクロのレベルの実証研究が必要であるなら、この指摘に加えて、ジェンダー的な分析が欠かせないこともあわせて述べるべきだろう。なぜ、農村における工業生産の拡大が起こったのか、そして農村社会はこれによってどのような影響を被ったのか。こうした問いには、誰が農村工業を担ったのかという点からの検証がなくてはならない。その際には、生産の現場における女性労働者の存在と重要な役割を確認することから始めなければならない。そしてそのうえで、労働をめぐる権力関係をみていく必要があるだろう。「経済発展」の評価は、こうした分析があつてはじめて可能になるのではないだろうか。

³⁷ Beaurepaire, *op.cit.*, p. 771.

